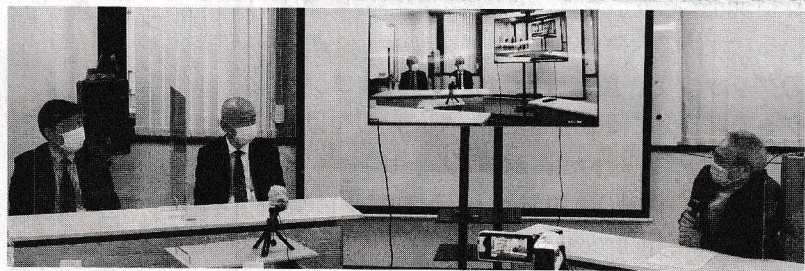


感染・免疫メカニズムと臨床応用すべき知見解説



Zoomで参加者とつっこんだ議論を展開した

日本・アジア口腔保健支援機構(IIJAOS、渡辺秀司理事長)は13日、東京都千代田区のJDNセミナールームとウェブ上で認定・総合診療歯科医認定コースの第12回セミナーを開催した。テーマは「口腔領域の疾患と免疫」で、講師は、浜田信城神奈川歯科

大学教授(口腔細菌学)と斎藤淳東京歯科大学教授(歯周病学)。歯周病を中心とする感染・免疫のメカニズムと、実際の歯科臨床で応用すべき知見を解説した。



浜田氏は、口腔細菌学に

関する最新の研究動向を紹介。アメリカで行われているヒト口腔マイクロバイオームのデータベース(ORCID)により公開されている755種類の細菌のうち、名前が付いて培養もできている菌種は57%に過ぎず、今後、新たな細菌がクローズアップされてくる可能性を示唆した。

また、ドイツ中世の修道院から発掘された重度の歯周病にかかった人の歯石からは、現在と同じP・シンジバリスなどの歯周病原菌の痕跡が検出されるが、日本の江戸時代のサンプルではそれらの菌が検出されなかったとの国内外の研究を紹介。鎖国下の日本で独自に発達した食文化が、明治期以降に欧米化するにしたがって、歯周病原菌が伝播、定着した可能性に言及した。

実際の歯周病治療での細菌学的な留意点として、最も安価で患者の行動変容につながりやすい方法が位相差顕微鏡だと指摘。健全な歯肉縁下細菌叢に比べ、歯周炎では運動性菌、スピロヘータが優位となることから、「動く微生物がリスク要因」だと説明しやすい点を強調した。

斎藤氏は、歯周病原菌と宿主免疫応答のメカニズムを中心に歯科治療やセルフケアの意義を解説すると

もに、国際的な保健上の課題となっている薬剤耐性(AMR)と抗菌薬使用の関係性に言及。「人間は微生物とセットで生きており、微生物だけを叩く発想は傲慢」との考え方を示しつつ、AMR対策としての抗菌薬適正使用について具体的に解説した。

具体的には、細菌検査と組み合わせたテラメイドの抗菌薬を、SRPなどの補助的な治療法として採用するもの。局所投与の

他、東歯大が慶應義塾大学と研究した歯周炎急発に経口投与する薬物療法も紹介した。

歯周病原菌の中には、頬粘膜細胞の中に侵入して細胞内で生きながらえるものもあることから、口腔細菌の特性を踏まえたアプローチが重要だと訴えた。

セミナーには臨床医だけでなく歯学部学生も参加。鋭い質問内容に、「国試合格後は、ぜひ、わが教室」と誘う一幕もあった。

かった。

キシリトール
ガム



歯垢蓄積を抑制

日本フィンランドむし歯予防研究所が紹介

日本フィンランドむし歯予防研究所(羽村章理事)は16日、フィンランド・トゥルク大学のエバ・サードリン名誉教授が昨年

に発表した「歯垢蓄積に対するキシリトール・チューインガムの効果」システム「ティックレビュー」を広く発信するためのプレス向け

説明会をウェブ上で開いた。同研究所によると歯垢蓄積に対するキシリトールの有効性を示したレビューは初めてという。

キシリトールの使用がむし歯抑制につながることは知られていたものの、むし歯の原因となるミュータンス菌や歯垢との関係に着目した研究のレビューはな

「短時間の咀嚼により歯垢中に高濃度のキシリトールが存在することが重要」「習慣的な摂取が望ましい」などとしている。

説明会で羽村理事長は、50%以上の濃度を条件としている点の重要性や、長時間咀嚼するとソルビトールガムでも唾液の効果によって歯垢蓄積が抑制されることなどについて言及。

なお、同レビューはドイツ歯科口腔顔面医学会と欧州歯科保存学会の機関誌『Clinical Oral Investigations』(2021年10月12日)に掲載されている。